

Title	ウェストミンスター神学会議をめぐって
Author(s)	松谷, 好明
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.18, 2000.11 : 240-257
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3463
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ウエストミンスター神学者会議をめぐつて

松谷好明

はじめに

ただ今ご紹介いただきました松谷です。ご紹介の中で一つだけ訂正させていただきたい点がありますので、お許しください。それは、私が出した本の一つ『ウエストミンスター神学者会議 議事録（抄）』（一表出版社、一九九六）について、翻訳であると紹介があつた点です。実はこれは翻訳ではなく、基本的な一次資料を私自身が短く要約したもので、種本は存在しません。私自身は神学者会議の全体像を全く知らずに欧米の研究者の著作やこうした資料に手当たり次第に当たつてきましたので、ずいぶん遠回りをいたしました。この本があれば、会議の全体像を把握するのに、わたしのように十年も二十年もかける必要がなくなると思い、次の世代の方々の便宜のために力を入れて出したものです。

さて、本日はこのような機会を与えられ、心から感謝しております。私は昨年六月に東京に赴任するまで長年地方の一伝道者として歩んでまいりましたので、学会やこの種の研究会に参加したことはこれまでありませんでした。きょうご出席の先生方はじめ、ピューリタニズムにかかわる研究者の先生方の著作、論文にはできるかぎり広く当たつてきたつもりですが、何分にも専門的な研究者の方々の前でお話するのは初めてのことで、後で忌憚のない、率直なご

意見、ご批判を賜われれば幸いです。

一 ウェストミンスター神学者会議とは何か

イギリス史研究、特に革命史研究にたずさわっている方々には常識的なことですが、ここにはそれ以外の専門の方々もおられますので、はじめに、ウェストミンスター神学者会議とはどういうものであったか、概略をお話しさせていただきます。

この会議は、英語では Westminster Assembly of Divines と言います。日本のイギリス史、イングランド革命史の研究の間では、これを「ウェストミンスター宗教会議」と訳するのが一般的ですが、私は英語で明確に Divines とある以上、やはり「神学者会議」とすべきだと思います。もちろん「神学者」といっても、それは今日のように神学校や大学の神学部で教えている学者という意味ではなく、大学で神学を学んだのち英国教会で聖職者となり、教会の牧師、あるいは両大学の教師になっている者の意です。

この神学者会議は、いわゆる長期議会によって召集されました。当時すでに決定的に対立していた国王から裁可が得られませんでしたので、法律 (Act) ではなく、議会独自の権限による条例 (Ordinance) で召集されたわけです。教会をめぐる諸問題について答申させるためにこうした神学者の会議を召集するという考えはずっと以前から、英議会内外にありましたが、なかなか実現に至りませんでした。いよいよ神学者会議召集条例の案ができて、各州、各大学のだれを会議のメンバーにするかで活発なかけひきがあり、一二一名の神学者を決めるまでには相当の時間がかかりました。

会議には、一〇名の上院議員と二〇名の下院議員が参加者として加えられました。彼らはよく「信徒代表」とか「信徒メンバー」と表現されますが、それは誤解を招き易い表現ですので、用いないほうがよいでしょう。彼らは、れつきとした国会議員だからです。なぜ神学者の会議に国会議員が出席するように変更されたのか、その事情を知るのに、有名なジョン・セルデンの『卓上語録』(Table Talk) が役に立ちます。セルデンは当時のイギリスを代表するヨーロッパでも最大の知識人の一人で、神学者会議には下院議員としてしばしば出席したのですが、彼の弟子がセルデンの死後に出した『卓上語録』の中で、こう言っています。「教会会議には、何人かの信徒が出席していなければならぬ。聖職者たちがこの世の仕事を書めにしてしまわぬよう、彼らを監視するためである。それは、ネズミ退治のためにミルク小屋に猫を入れるとき、利巧な女なら、猫がクリームを食べてしまわぬよう猫の見張りに女中を遣るのと同じである」(The Table-Talk of John Selden, with a Biographical Preface and Notes by S.W. Singer, 1860, pp.250-251) と。つまりセルデンは、猫を見張る女中のように自分たちは、国教会体制をこれからどうするかという重要な問題について神学者たちを見張っていないてはならないというのです。いかにもエラストス主義者らしく、あからさまに牧師、神学者不信を表明しています。

こうした背景のもと神学者会議は、一六四三年七月一日から一六四九年二月二十二日の自然消滅まで、合計一一六三回の会合を開きました。召集された神学者は一二二名ですが、国王による参加禁止命令や種々の事情のため、実際に出席した神学者はそれほど多くありません。また、結果として五年半の長期にわたり開かれませんでしたので、出席者数は時期によつてさまざまですが、ごく大まかに言つて平均五〇名ぐらいだったと言つてよいでしょう。定足数が四〇名で、それに達しない場合は全体委員会にすることが普通でした。長期欠席者や死亡者の代わりに、委員を補充することもしました。午前九時(時には八時から)から一時ないし二時までが本会議で、午後は委員会を開くのが通例でした。原則として月曜日から金曜日まで、時に土曜日も、という具合にして、五年半、計一一六三回の会合を開いたわけです。

会議がこれほど長期にわたる、膨大なものとなるとは、召集した英議会も、召集された神学者たちも、だれ一人予想しておりませんでした。

ここでこの会議を、ピューリタニズムの歴史全体の中に位置づけて考えてみたいと思います。そもそもピューリタニズムをどう捉えるかについては、ご承知のとおり多くの議論がありますが、ここでは J. B. Marsden の名著「The History of the Early Puritans」(1850) と「The History of the Later Puritans」(1852) にならって、ごく大雑把に、前期ピューリタニズムという総称で大体十六世紀のピューリタンを、後期ピューリタニズムという総称で十七世紀のピューリタンを考えることにいたします。第三の類型としてアメリカのピューリタンを考えなければなりませんので、ピューリタニズムという場合、以上のように、大きく三つのグループに分かれます。すると、ウエストミンスター神学者会議は、明らかに後期ピューリタニズムの範疇に入ります。一六四〇年の長期議会の成立とそれに続く内戦の開始で、「ピューリタン革命」「市民革命」が起こり、神学者会議はその真つ只中で行われました。したがってウエストミンスター神学者会議は、前期ピューリタニズムの総決算だと言つてよいと思います。

前期ピューリタニズムは、周知のごとく、祭服論争、聖書研究集会（プロフェサイイング）、クラシス運動、説教運動、スピリチュアル・ブラザーフードと呼ばれる運動など、さまざまな段階を経ます。その中に、カートライトやトラヴァーズのように長老制をとる国教会を目指す人々もいました。一六〇三年にイングランド国王も兼ねることにしたジェームズ一世が、ハンプトン・コート会談においてピューリタンの要求を退けて以来、彼らは議会に結集する人々と一層結び付きを深め、長期議会を迎えるということになっていきました。このような意味でウエストミンスター神学者会議は、おおよそ百年にわたるピューリタニズムの総決算であると考えられるわけです。

とはいえ、神学者会議に結集した神学者たちとは異なる立場をとったピューリタンたちが、多数いたことも事実です。特に主教制と祈祷書の強制が事実上廃止されるや、セクトと総称されるさまざまな個人、グループの活動が活発に

なりました。こうした人々は、神学者会議の主流派であつた長老派と、いわゆるエラストス派からは、異端あるいは、秩序を乱す危険分子として、検閲と取り締まり、弾圧の対象と見なされました。会議内の独立派は、表向きにはセクトと一線を画し、実際にはセクトとさまざまなかかわりを保つというやり方をいたしました。セクトから見れば神学者会議は、主教体制と変わらぬ抑圧的な教会体制を樹立しようとしている、と映つていたわけです。

もう一つ、神学者会議とアメリカのピューリタニズムの関係を考えたいと思います。ここでは、特に二つの点が重要です。一つは、英議会の当初からの狙いの中に、アメリカに渡つていた独立派（会衆派）の牧師たちを神学者会議に招くことがあつた、ということですが、そもそもウェストミンスター神学者会議は、しばしば誤解されているように、長老教会の会議ではなく、本来、英国教会、日本で言えば聖公会、の会議です。イギリスの宗教改革史をひもとけばすぐ分かるように、大陸の諸教会の神学者を招いて神学者会議を開催することが、英国教会の指導者たちの長年の夢でした。その伝統を継いで英議会としては、せめて新大陸の会衆派指導者を招きたいと考えていたのですが、実現に至りませんでした。さきにアメリカに渡つていた人たちにしますと、ロンドンに戻つて会議に参加しても、もともと多数派（長老派）と體質的に合わないだけでなく、多数決で負けるのは分かりきつていたため、誰も来ようとはしませんでした。ただ彼らは、会議内の独立派の人々にとつて、終始大きな精神的支えであつたと言えます。

アメリカとの関係で言わなければならない第二の点は、ウェストミンスター神学者会議で生み出された信仰告白や大小教理問答などの信仰規準が、アメリカの諸教会に大きな影響を与えたという点です。長老派系の教会には直接的に、会衆派、バプテスト派などの教会には間接的に、と言えます。会衆派について一言加えますと、彼らは本国にいた時分には国教会に対して自由と寛容を唱えていましたが、植民地において自らが体制側となるとそう言っているわけにはいなくなりました。長老派にまさる厳しい拘束力を教会会議に認めるようになりますので、ピューリタニズムの多面的な歴史を正確に把握するのは容易ではありません。

ただピューリタニズムの歴史を全体として捉えた場合、ウェストミンスター神学者会議が最大、最重要の会議であったことは否定できない事実でありましょう。いな、プロテスタント史上最大の会議であったことも確かです。このように言ったからといって、私は、この会議を称賛して「最も優れた神学者たちの会議」と呼ぶ人たちには必ずしも賛成しません。現実に会議を構成した神学者たちの学歴や学問上の業績についての本格的な研究論文がすでに幾つか出ておりますが、そういうものを読みますと、会議の神学者たちは必ずしも主教派の神学者に劣るとは言えないが、かといって史上最も優れた神学者たちであったとも言えない、というのが妥当な見方だと思われれます。

二 ウェストミンスター神学者会議に対する従来の歴史的評価、関心

これまで見てきたように、ウェストミンスター神学者会議は、ピューリタン革命、あるいは市民革命の真つ只中に、長期議会の宗教問題に関する諮問機関として五年半にわたり公的に開かれ、さまざまな教理的、実地的な答申を行った会議です。さらに会議は、上下両院に対して、定期的にも随時にも、説教者を派遣し続けました。

このような重要な意義をもつ会議であるにもかかわらず、従来、イギリスにおいても日本においても、それにふさわしい評価がなされ、関心が注がれてきたとは到底言えないように思われます。イギリス教会史の多くはアングリカンの立場から書かれておりますが、そのような本の中では、ウェストミンスター神学者会議についての記述は数行か、多くても一頁に満たないことが多いのです。有名なイギリス教会史家オウエン・チャドウィック (Owen Chadwick, *History of the Church 3 — the Reformation*, Penguin Books) や、八代崇先生らが翻訳されたムアマン (John R. H. Moorman, *A History of the Church in England*, Morehouse Group, 聖公会出版『イギリス教会史』一九九一) などが、その代表的な

例です。英国教会にとって根本的に重要な教説は「使徒継承」(Apostolic Succession)、すなわち主教による聖職按手ですから、一六四〇〜六〇年は、その連綿と続いてきた伝統が一時的に断絶した時代ということになります。ピューリタン革命当時の王党派、クラレンドン伯エドワード・ハイドらは、当然、大反乱(Great Rebellion)の時代と呼ぶわけですが、いずれにしてもこの「危機の二十年」「暗黒時代」についての公平な評価はあまり見られないように思われます。

この時期に焦点を当てて書かれた、唯一の本格的な歴史研究書があります。有名なW. A. Shawの二巻本で、その正式なタイトルは、*A History of the English Church, during the Civil Wars and under the Commonwealth, 1640-1660* (1900)です。ショーは、この二十年間の断絶がいかにして起こったかを、法制史的に明らかにしようとしてしました。厳密に資料に基づいて冷静に叙述していますが、ウエストミンスター神学者会議に対しては何ら共感するところはなく、基本的には批判的な立場だと思えます。

それでは、イギリスで盛んなイングランド革命史研究の中では神学者会議はどのように取り扱われてきたのでしょうか。日本のイングランド革命史研究の手法、ひな型であるこれらの研究は、多くの場合、「革命を担った」とされるラディカルな人たちに焦点が当てられ、神学者会議を構成していた主流派の「長老派」やその支持層は、保守反動か、そこまでいかなくても革命遂行に挫折した人々、というのが暗黙の前提になっており、会議の内容自体に十分な注意が払われたとは言えません。例えば典型的な例は、宗教的独立派と議会の独立派、宗教的長老派と議会の長老派とが、それぞれどう対応するのか、それぞれ二者間の関係はどうなっていたのかという根本的な問題がいまいのままに論じられてきましたから、神学者会議についても議会についても、さらに両者の関係についても、不明確なまま論じられてきたことです。

では長老派は、ウエストミンスター神学者会議についての歴史的研究をどのように進めてきたか。残念ながらイング

ランドにおいては、長老教会自体の弱体化のために、堅実な歴史的研究を進めることは不可能だったと言えます。すなわち、イングランドでは、一六六〇年の王政復古、それに続く一連のクラレンドン法、Great Ejectionにより、長老主義をとる教会は立ちゆかなくなり、十八世紀にはほぼ壊滅いたします。そのあと、スコットランドから長老派の牧師が派遣されるようになり、彼らと、イングランド中部から北部に細々と生き延びていた長老主義者とが結集して、十九世紀にイングランド長老教会が成立しました。この間イギリスの長老主義は、神学と敬虔で卓越した牧師であつたマシュー・ヘンリーとその父フィリップ・ヘンリーや、マシュー・ヘンリーの師であつたロンドンの牧師・神学教師ドリトルなどを生み出しました。また十九世紀、アメリカの長老教会やオランダ改革派教会に中国伝道のヴィジョンをかきたてた、中国宣教師ウィリアム・チャーマーズ・バーンズも、イングランド長老教会の人です。しかし先のような全般的な事情のため、イングランドの長老教会においては、自らのルーツについての歴史的研究は極めて不十分なままでした。

スコットランド、アメリカの状況については、私の『ウェストミンスター神学者会議の成立』の「序論」をご参照ください。私としては、特にこの二十年のアメリカにおける活発なピューリタニズム研究に注目しています。ウェストミンスター神学者会議についても次々と研究がなされ、幾つもの博士論文が書かれております。

それでは最後に、日本におけるイギリス史、イギリス革命史、ピューリタニズム研究において、ウェストミンスター神学者会議がこれまでどのように取り扱われてきたかを考えることにいたします。お手元にお配りした年表は、戦後わが国において出版されたイギリス革命、ピューリタニズム関係の単行本を年次別に一覧にしたものです。これはこの分野の書物をすべて網羅しようとしたものではなく、私自身のライブラリーに置いてある、ひととおり目を通したのか、詳しく読んだものです。これらの書物を念頭において私見を申し上げるのですが、ウェストミンスター神学者会議に関しては本格的な研究書はなく、それへの言及もごくわずかです。例えば、浜林正夫先生の『イギリス市民革命史』（未来社、増補版、一九七二）に「ごく短く、『イギリス宗教学史』（大月書店、一九七八）にもう少しだけ詳しく記されて

いますが、会議の全貌はこれらでは分かりません〔注・研究会後に、上田惟一著『ピューリタン革命史研究』（関西大
学出版会、一九九八）を入手し、驚愕した。ウエストミンスター神学者会議に正面から取り組んでいる日本人研究者が
いたからである。編者あとがきによれば、著者、上田惟一関西大教授は、一九九七年十月二十二日、享年五十三歳で
急逝されたという。ただ、極めて残念なことに、本書は、人名、地名の表記から始まって多くの個所が上田氏特有の解
釈でかなり損なわれている〕。

日本におけるピューリタニズム研究の最も優れた古典は、大木英夫先生の『ピューリタニズムの倫理思想』（新教出
版社、一九九六）と『ピューリタン』（中公新書、一九六八）です。しかし、先生の研究、関心は別の角度からのもの
ですから、当然のこと、神学者会議は特に取り上げられておりません。

これら以外の研究者の書物の中にウエストミンスター神学者会議への言及が散見されることもありますが、総じて、
その重要性にふさわしい取り扱いを受けていないと結論してよいのではないかと思います。

クロムウェルやミルトン、バニヤン、ジョン・グッドウィンといった個人や、当時の千年王国論について子細に論じ
られることはあつても、同じ時に五年半続いていたこのウエストミンスター神学者会議が十分取り上げられることはな
かったと言わなければなりません。我田引水でまことに恐縮ですが、その意味で、今度私が出しました『ウエストミン
スター神学者会議——その構造化』（一麦出版、二〇〇〇年一月）は、従来の研究の空白をうめるものと言えるのでは
ないかと思えます。

三 「ウエストミンスター学」事始

ウエストミンスター学などという言い方は従来ありませんでしたが、この神学者会議に焦点を当てて学んでいくとこれにかかわる多くの問題が見えてまいりますので、私はこれをウエストミンスター学と呼んでもいいのではないかと考えております。

まず第一に、ウエストミンスター神学者会議は、これまで見てまいりましたように、ピューリタン革命、市民革命の産物ですから、その面での研究課題は多くあります。第二に、これも短く言及するにとどめますが、神学者会議がイギリスにおけるピューリタニズムの成果であり、総決算であるように、神学者会議が生み出した信仰告白や大小教理問答、教会政治規程、礼拝指針も、イギリスの宗教改革の成果であり産物です。したがって、ウエストミンスター諸文書の教理、教説をそれ以前の宗教改革者たち、ピューリタンのそれと比較研究することは重要な課題となります。

さらに、特にウエストミンスター信仰告白について言えば、これは教理的に言ってイギリスのピューリタニズムの総まとめという意味合いをもつだけでなく、大陸の宗教改革を含めて、全宗教改革の教理的総決算という意味をもつていと私は考えます。従来の研究では、ウエストミンスター信仰告白の下敷きはアルマー大主教アッシャーが中心となつて作成した一六一五年のアイランド簡条であると、強調されてまいりました。両者の比較研究が幾人かの学者によってなされてきたのはそのためです。しかし私としては、ウエストミンスター信仰告白をもつと英国教会の信条史の中に位置づけ、特に三十九箇条（四十二箇条）と比較研究することが重要だと思えます。しかし、さらに重要なのが、一六四三年にロンドンで再刊された一五八六年の英訳本『ハーモニー』に納められた諸信仰告白との比較研究です。

この『ハーモニー』について説明いたします。この本はもともと、一五八一年にジュネーブで出版されたラテン語の信仰告白集です。この本が編まれた背景には、ローマ・カトリック教会とルター派教会における教理の確定がありました。すなわち、前者は一五四五〜六三年のトリエント公会議によってプロテスタント宗教改革に対して自らの立場を確定し、後者は、一五七七年の和協信条、一五八〇年の和協信条書によって自らの立場を明確にいたしました。これに対していわゆるリフォーームドの陣営は、ジュネーブのテオドール・ベザを中心に数か国の教会の国際委員会を発足させ、一つの共通のリフォーームド・コンフェッションを作ろうと努めました。しかし結局それは不可能と判断され、その代わりに、フランス改革派の牧師サルナーが教理項目を十九に分けて、各項目のところにそれぞれの信仰告白から該当する箇所を抜き書きして一冊の書物にいたしました。これを国際委員会として受け入れ、出版したのが『ハーモニー』（ラテン語原題、*Harmonia Confessionum Fidei Orthodoxarum et Reformatorum Ecclesiarum*）です。これが英訳されて、一五八六年イギリスのケンブリッジで出版されました。この時ラテン語原本に収集された十一の信仰告白に加えて、一五六〇年のスコットランド信仰告白が入れられました。こうしてできあがった英文『ハーモニー』が、後期エリザベス朝ピューリタニズムの教科書の一つとなったわけです。元々の十一の信仰告白は、アウグスブルク信仰告白（一五三〇）、四都市信仰告白（一五三〇）、バーゼル信仰告白（一五三四）、第一スイス（第二バーゼル）信仰告白（一五三六）、ザクセン信仰告白（一五五一）、ヴァイルテンブルク信仰告白（一五五二）、フランス信仰告白（一五五九）、イングランド信仰告白（一五六二）、第二スイス信仰告白（一五六六）、ベルギー信仰告白（一五六六）、ボヘミア信仰告白（一五七三）です。したがって『ハーモニー』は、ルター派からワルドー派を含む、リフォーームドの信仰告白集と言うことができます。

ところで、ウェストミンスター神学者会議がスタートした一六四三年、神学者会議から出ていた神学書検閲官らは、一五八六年の英訳『ハーモニー』の複製版の出版を許可いたしました。ということは、神学者会議が新しい信仰告白を

作成したとき、神学者たちは、単に三十九箇条やアイルランド箇条だけでなく、『ハーモニー』に入っていたアウグスブルク信仰告白からボヘミア信仰告白、そしてスコットランド信仰告白までを視野に入れ、それらを踏まえて書いたということだ。したがって、このようにして書き上げられたウエストミンスター信仰告白は、十七世紀中葉の時点で、非常に幅の広い、言わばリフォームド・エキュメニズムの信仰告白である、と私は考えております。

このように神学者会議は、諸信仰告白を通して大陸の宗教改革と深い関係をもっており、その中で、「ウエストミンスター学」の射程は一段と伸びますが、それは次のような事実によつてさらに拡大していきます。例えば、神学者会議には、フランス改革派教会で任職された三人の牧師が、ロンドン、カンタベリーのユグノー教会の代表として出席していましたから、ピューリタニズムとユグノーの関係、特に、ウエストミンスター信仰告白とフランスの改革派神学の間には、興味深い課題です。

また、ウエストミンスター諸文書 (the Westminster Documents) は、その後イングランドではあまり用いられませんでした。スコットランド、北アイルランドではよく用いられ、さらにそれらの国を通してアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そして韓国や日本へと伝えられ、それぞれの国の長老教会の形成に大きな役割を果たしました。こうした歴史についての研究も、ウエストミンスター学がなくてはならぬ一面と言えます。

時間が限られておりますので、ウエストミンスター学の輪郭はこの程度にして、最後に私自身の個人史に即して、ウエストミンスター学事始をお話させていただきますと思います。私は先程ご紹介いただきましたように、福島県の福島市で育ちました。十六歳、高校一年のとき無料で英語が習えるというので、アメリカ人宣教師のバイブル・クラスに通いはじめました。英語と日本語の対訳聖書で山上の垂訓を教えられて、強い衝撃を受けました。その宣教師の先生は、教文館の『日本キリスト教歴史大辞典』に「マツキルエン」という名で載っていますが、私たちは「マキルエン」先生と呼んでいました。マキルエン先生ご夫妻は実に優れた人格のクリスチャンで、私も私の家内も若い時代、大きな影響を

受けました。

このマキルエン先生は、アメリカの正統長老教会（OPC）の宣教師で、私が通い始めたときはちょうど福島市での開拓伝道を始めたりでした。私はやがて英語よりも聖書そのものに心を捉えられ、土曜日のバイブル・クラスのほか、日曜日は朝と夕の礼拝、そして木曜日夜の聖書研究・祈祷会と、少なくとも週に四回は先生の御宅での集会に行くという生活を送るようになりました。こうした中で、礼拝のたびごとにウエストミンスター小教理問答を交読し、少しずつ学んでおりました。

通っていた高校は地方の受験校でしたので、日曜日には模擬試験がひんばんに行われていましたが、私は日曜日には学校に一切行かず、教会の礼拝に行っていました。そのため学校の先生方や両親にずいぶんと問われたり、批判されましたが、私としては小教理問答にある通り、日曜日はキリスト教安息日として丸一日きよく休むほうがよいと考えて、行きませんでした。こうして高校時代、ピューリタニズムの戦いとウエストミンスターの教理は私にとつて非常に身近なものだったわけです。

一橋大学に入学してからは、日本キリスト改革派の東京教会に通うとともに、阿久戸光晴先生と同様に空手部に入り、同時にキリスト者学生会（KGC）の活動をしておりました。教会では青年会でウエストミンスター大教理問答を交読、勉強したり、全体で信仰告白を学んだりいたしました。矢内昭二牧師が新教出版社から『ウエストミンスター信仰告白講解』を出されたのは、その頃のことです。大学ではあまり勉強に打ち込みませんでしたが、二年生のとき山田欣吾先生のゼミナールでアンリ・ピレンヌの『ヨーロッパ史』（英訳）を読んだこと、三年、四年と南博先生のゼミナールで社会心理学を学んだことは、その後非常に役に立ちました。

大学時代、神学の面で真剣に取り組んだのは、渡辺信夫訳のカルヴァンの『キリスト教綱要』です。これは大学時代から神学校時代にかけて、数回通読いたしました。以後、『綱要』と渡辺信夫先生の全著作は、私の神学の学びの一方

の座標軸になってきました。もう一つの座標軸は、最初フランクリン著『キリスト教社会倫理概説』（一九六四）の訳者として知った大木英夫先生です。大木先生には昨年私が東京に越してまいりましてから初めてお目にかかりましたが、私は先生のほぼすべての著作を読んでおりましたので、初対面とは感じられないほどでした。渡辺信夫、大木英夫、このお二人の先生に私は学生としてお習いしたことはないのですが、私にとつては歴史神学の学びと教会の問題を考えるうえで、常にタテとヨコの座標軸でした。

大学を終えた私は、日本キリスト改革派の牧師になるべく、迷わず神戸改革派神学校に進みました。その神学校の修業年限は三年三か月ですが、私はそこに三年弱いて、卒業直前に退学しました。実はこの中退と私のウエストミンスター研究は、固く結びついております。というのは、日本キリスト改革派教会はウエストミンスター信仰告白を旗印に掲げる教会なのですが、その神学校においてウエストミンスター信仰告白を教えられることは全くないという驚くべき事態がありました。神学校は生徒の募集にウエストミンスターの正統主義を掲げ、教師としての按手の際にはウエストミンスターの教理体系を受け入れる誓約を求められるのに、ウエストミンスター信仰告白については何も学ばないまま卒業するのです。神学校を卒業して改革派の牧師になると、ウエストミンスターを体得していると自他共に認める存在となるわけですから、実にまか不思議です。その他、あまりに低い神学教育のレベルや、カリキュラムの内容などさまざまな問題がありました。そこで私は思い悩んだ末、一つの行動に踏み切りました。授業を数日欠席し、その理由として「神学校の授業についての私見と教授会への質問」と題した長文の意見書を教授会に提出しました。これに怒った校長と教授会は直ちに私を無期停学処分とし、寮からも追放しました。私の三年間の思想と行動は、神学校の共同体を破壊するはなはだ悪いものだった、というのがその理由です。言うまでもなく、若さと罪ゆえの間違いや失敗が私にもあつたわけですが、教授会が一切の話し合いを拒否し、回答も拒否して処分だけ行つたのは、明らかに典型的なアド・ホミネム・アーギュメント（議論への反論の代わりになす人身攻撃）のたぐいでした〔注・同級生たちとは言えば、校長か

ら示唆されるままに、「自分たちの学年から不心得な者を出して申し訳ない。自分たちは教授会の指導に全面的に服します」という趣旨の謝罪文を書き、署名して教授会に提出しました」。

こうして私は神学校を放り出されることになったわけですが、私の疑問は深まるばかりでした。改革派が表向き掲げているウエストミンスター信仰告白や大小教理問答とは、一体どういうものか。いつ、どこで、誰が、どういう事情で書いたのか。三五〇年間、それらはどのように伝えられ、受けとめられてきたのか。そもそもわれわれは、昔の信仰文書をどう理解し、どのように展開していくべきなのか。こうした疑問が次々に浮かんできました。周囲の誰に聞いても分からず、手引きをしてくれる参考書も見つかりませんでした。

幸い奨学金を得て一九七二年〜七四年の二年間、家内と共に英国のブリストルにまいりました。英国教会福音派のトリニティ神学校に籍を置き、その寮に住みながら、最初の一年はブリストル大学神学部大学院ディプロマ・コースを取らなければなりませんでした。これはごく一般的な初歩のコースで、私の関心にはほとんど役に立ちませんでした。唯一例外として益があつたのは、そのコースの学外講師がブリストルのバプテスト神学校から来ていて、私もその神学校の図書館を利用できたことです。ある日そのバプテスト神学校の書棚に、ほこりにまみれて、何とA・F・ミッチェル編の『ウエストミンスター神学会議事録』（二八七四）があるのを見つけました。この本は、今ではリプリント版で誰でも安く手に入れることができますが、一九七二年当時は数少ない貴重な資料でした。私はほこりをはらつてそれをコピー屋に持ち込み、特にお願いで一晩で全部コピーしてもらい、本は無事図書館にそのまま返しました。こうしてコピーしたものを一九七四年に帰国してから製本して、その後ずっと使用してまいりました。

トリニティ神学校には特別研究生として二年間在籍し、主にバックカー教授につきましました。このJ・I・バックカーは、ピューリタンのジョン・オウエンの救済論の研究でオクスフォード大学から博士号を得た（有名なナトールのもと）組織神学者で、現在はカナダのバンクーバーにあるリージェント・カレッジの教授です。英米の福音派の間で組織神学者

として最もよく知られた人です。トリニティでこの先生の組織神学の授業やビューリタニズムのゼミナールに出席したわけですが、ここでもウエストミンスター神学者会議や信仰告白について詳しく学ぶ機会はありませんでした。個人指導のときに、私がウエストミンスターについて調べレポートしたことについて若干コメントとアドヴァイスを受ける程度でした。しかし、パッカー先生からは、もう一冊の、極めて貴重な本をお借りし、それをコピーすることができました。神学者会議に参加していた著名な旧約学者ジョン・ライトフットの著作集の第一三巻、すなわち、彼が神学者会議に出ていたときの日誌『ジャーナル』がそれです。これも一九七四年に帰国してから製本し、本格的に取り組みを始めました。

これら以外の一次資料を入手したのは、それ以降のことです。上述のミッチェル編の印刷本『議事録』は、実は議事録原本の三分の一に当たるだけです。残りの三分の二に当たらなければ、神学者会議の全貌は分かりません。それはエディンバラ大学ニューカレッジの図書館から、マイクロフィルムで購入することができました。ロンドンのドクター・ウィリアムズ・ライブラリーにある議事録原本を十九世紀に手書きで筆写したものが、ニューカレッジ図書館に納められているわけです。そのマイクロフィルムをリーダーにかけてプリント・アウトし、手作り製本をしたものが一五冊になりました。

もう一つの重要な一次資料があります。それは、スコットランド特命委員の一人ロバート・ベイリーの書簡集です。ベイリーは実にユニークな人で、会議には何年間も出ていましたが発言したことは一度もありません。それでありながら彼はメモ魔で、スコットランド教会や牧師の友人たち、オランダにいる牧師のいとこ、などに、会議の様子をこと細かに記した数多くの手紙を送っていました。ベイリーはこうした手紙の中で、政治情勢から独立派に対する懐柔策まで生き生きと書いておられます。公刊されたベイリーの書簡集は全三巻ですが、神学者会議当時のものはほとんど第二巻に納められています。ベイリーの書簡集はイングリッド革命史研究にとっても非常に大切ですが、私の見る限り、日本の

研究者によつてまだ十分に研究されていないように思われます。

これら以外に、膨大な量の英議会両院の議事録や、スコットランド教会と特命委員の間の書簡や公文書がありますが、私自身はこれまでのところそれらの研究まではとても手が回りませんでした。

ところで、先に挙げたような一次資料を入手はしたものの、これらを解読し、相互に関連づけるのは、非常に困難でした。ここにいらつしやる佐野正子さんも最初はそうだったと思いますが、とにかく、手引きをしてくれる人がいないと本当に歯が立ちません。何度も何度も試行錯誤し、挫折を繰り返しながら、ようやく少しずつ前進しました。そうして一九九二年に何とかまとめて出版したのが『ウェストミンスター神学者会議の成立』（当初、自費出版、のち一麦出版社取り扱い）です。この本の狙いは、神学者会議がピューリタニズムの歴史の総括であること、したがって信仰告白を研究する場合は何よりもイギリス宗教改革とその信仰簡条の背景から解釈すべきこと、スコットランドとの関係については、今日しばしば唱えられるような、ウェストミンスター信仰告白はスコットランドの圧力のもとに作られたスコットランド的なのだという説、また、それとちょうど正反対の、スコットランド教会がスコットランド信仰告白の代わりにウェストミンスター信仰告白をとつたのは単に政治的状況の産物にすぎないというような説は、歴史的に根拠が薄いこと、などを明らかにすることでした。

『成立』は私が構想しておりました（ウェストミンスター神学者会議の歴史）の上巻に当たり、今年一月一麦出版社から出した『ウェストミンスター神学者会議——その構造化』は、その下巻に当たります。この巻では、五年半にわたる神学者会議において教会政治規程、信仰告白、大小教理問答が作られる全過程と、その過程で行われた主な議論を明らかにしています。これを丁寧に読んでいただければ、長老制、長老主義については、例えば、次のようなことが明らかになります。すなわち、第一に、よく言われる長老制神定説、ユース・デイウィナム説は、極めてあいまいな概念だということです。そもそも、ウェストミンスター神学者会議としてこの説をとつたとは必ずしも言えません。また、会

議での議論を追うと、ユース・デイウィナムとは一体何を意味するのか、そのこと自体が最後まであいまいなままであったことが分かります。第二に、ウェストミンスターの政治規程は、徹頭徹尾、国教会たる英国教会のための政治規程ですから、これを手本にして今日の日本で長老主義教会政治をやらうとすることは明らかに時代錯誤であり、全く不可能だということです。大木英夫先生が何年も前に指摘しておられるとおり（中公新書『ピューリタン』参照）、十七世紀のウェストミンスターの神学者たちが考えていたのはパリッシュ（教区）を単位として全国を網羅する統一的な国教会で、この政治規程はそれを大前提としたものです。ところが今日、イングランドにおいてでさえ、古典的な意味でのパリッシュは事実上は存在しません（名目上、あるいは近代的な形式が残ってはいるが）。まして現代の日本において、あるいは世界のどこにおいても、教会は有志から構成されるコングリゲーションとして以外には存在しません。というより、それ以外では存在が不可能です。ですから、ウェストミンスター政治規程をわれわれが用いようとする場合には、コングリゲーションリズム（会衆主義）の原理を踏まえて読み替え、翻訳、ないし応用がどうしても必要となるわけです。

以上は、『ウェストミンスター神学者会議——その構造化』から明らかにすることの一例にすぎません。十六、七世紀の古典的長老主義と現代の長老主義の連続と不連続の面をこのようにして明確にして、事足りりとするのではなく、私としてはこれから、何とかしてウェストミンスター信仰告白の歴史的・批判的注解を書きたいと考え、微力ながらその方向へ第一歩を踏み出したところです。力にあまる願いだとは思いますが、それとともに、ウェストミンスター信仰告白に表明されているような伝統的、あるいは正統的なキリスト教と、同時代のホップスやバニヤン、ミルトン、少しあとのロックといった哲学者、文学者たちとの関係をより深く学んでまいりたいと考えております。

時間がなくなりましたので、ピューリタニズム研究室が取り組むべき課題、将来へのビジョンについてはまたの機会とさせていただきますと存じます。長時間ご静聴いただき、ありがとうございます。